

作者プロフィール

柚木 文夫氏

千葉県隊友会会員 習志野支部長 桧町陸幕 平成2年退官 1958年防衛大学卒
元防大山岳部監督 現自衛隊山岳連盟会長

大日岳 ー熊との出会いー

室堂平からの大日岳



9月末、富山県・大日岳（2606m）に出かけた。前夜は地獄谷温泉泊り、翌日は奥大日岳・前大日岳を縦走して大日平山荘泊り、最後の日は称名ノ滝を見物して富山に出る、至極のんびりした山旅である。

朝7時、地獄谷・雷鳥荘出発。雷鳥沢キャンプ場を抜け、浄土川を渡る。夏の間は賑わうキャンプ場に今は人影もない。約1時間の登りで新室堂乗越の稜線に出る。立山川を隔てて目前に立ちはだかる剣岳に息をのむ思いである。

尾根伝いののんびりした道を奥大日に向かう。この辺はもうクサモミジが始まり、チングルマの群落が真紅の毛氈のように豪華である。眼下の弥陀ヶ原高原がクサモミジに彩られるのも、もう間もなくであろう。



ロックガーデン

10時、奥大日岳頂上。この頃からガスが上がって来て、折角

期待した眺望も台無しである。風はないが、霧とも雨ともつかぬ天候になり以後、雨衣を着ての道中となった。

大日小屋への途中、通称ロックガーデンを抜ける。ハイマツの緑の中に格好のいい巨岩が散在し、どこか日本庭園の中を散策するような風情である。

と、ある岩角を回った時、思わず立ちすくんだ。10分ほど先に、四つん這いの熊のお尻が見えたのである。すると、



熊はやおら、おもむろに首を回して、肩越しに小生をじっと見つめた。目と目が合った。身体中の血が凍った。しばらく睨み合いが続いた。そのうち熊の方がファイと視線をそらし、一跳びして稜線の彼方に消えた。今思い出すだに、全身から冷や汗が噴き出す瞬間だった。

前大日岳は、大日小屋に荷物を置いて空身で往復した。次いで長い下りの後、湿原の中の木道をたどって今夜の宿、大日平山荘到着は午後3時となった。客は小生1人だけ。小屋番との差し向かいの夕食は、熊の話で大いに盛り上がった。

翌日は良く晴れた。雨に濡れた大日平の草原散歩を楽しんだ後、昔懐かしい称名坂



をエッチラオッチラ下った。落差日本一を誇る称名ノ滝を見物した後、立山駅まで歩くつもりで車道をとぼとぼ歩いていたら、途中で工事の軽トラックに拾いあげられた。田舎の人の親切にただただ感謝。